

目次

まえがき

6

序章 なぜ今、ファシズムを学ぶ必要があるのか

9

日本のファシズム関連本が役に立たない理由／新・帝国主義の時代／グローバル資本主義に対する三つの処方箋／福祉国家としてのファシズム／日本人のファシズム・アレルギー／真理は人を自由にする

第一章

ファシズム前史のイタリアとムッソリーニ

23

イタリア統一までの歴史／土方成美の『ファシズム』／国家と教会の対立／ムッソリーニの不人気／スイスでの知的交流／第一次世界大戦への参戦／ムッソリーニの転換／戦闘ファシヨの結成／ムッソリーニ政権の樹立

第二章

ファシズム独裁の誕生と死

選挙法の大改正／マッテオッティ殺害事件／組合を基盤とした国家構想／混合経済の導入／教育者ムッソリーニ／生まれながらのドゥーチェ／親日派ムッソリーニ／ムッソリーニとヒトラーの違い／イタリア・ファシズムの終焉

第三章

ファシズムの内在的論理

世界に広がっていったファシズム／「ファシズム」というレッテル貼りの横行／塹壕体験から得た戦闘精神／田辺元『歴史的現実』／「全体」とは何か／理論と実践の統一としてのファシズム／民族主義とファシズムの違い／サンディカリスムの影響／自由主義への評価／民主主義が内包するファシズムの種

第四章

ファシズムを用意した「生の哲学」

新明正道のファシズム論／ファシズムの合理主義批判／未来派運動と宮崎アニメ／ニーチェとデルタイ／ニーチェのエリート主義／社会主義も合理主義にすぎない／「生の感情」と国家・国民の結合／行動が理論をつくっていく／ファシズムの潜在力

第五章

テクノロジ―としてのファシズム

マラパルテの『クーデターの技術』／ロシア十月革命はなぜ起きたのか／トロツキーの「反乱の技術」／「カップ―揆」が失敗した理由／ナポレオンの犯した誤り／フランス革命はなぜ独裁制に行き着いたのか／ムツソリーニはトロツキーの「戦術」を学んだ／福田和也の『日本クーデター計画』

第六章

日本でファシズムは可能か

東京は「君主の存在しない共和国」／行きすぎた「権力の分散化・多元化」／大政翼賛会の挫折／「しらす」と「うしはく」／軍部のセクシヨナリズム／「しらす」型組織の無責任体質／玉碎思想の論理／北朝鮮と戦前日本の共通点／ファシズムはヤクザの論理／中間共同体の重要性／日本が避けなければならない道

あとがき

参考文献

まえがき

二〇一七年は国際情勢が緊迫した年だった。東西冷戦終結後、蓄積されていた負のエネルギーが一挙に爆発したという感じだ。そのことを端的に可視化したのがアメリカにおけるドナルド・トランプ大統領の誕生だった。トランプ大統領が誕生しなければ、北朝鮮の核・弾道ミサイル開発問題についても、ここまで朝鮮半島情勢が緊張することはなかったであろう。

それに加え、中東での緊張も高まっている。アメリカ議会は一九九五年一〇月に、エルサレムを「イスラエルの不可分の首都」と認め、テルアビブからのアメリカ大使館移転を承認する法案を可決した。もっともアメリカの歴代大統領は、この法律を直ちに実施すると、中東で大混乱が起きるので、六カ月ずつ、法律の施行を遅らせる大統領決定を行っていた。この政策を二〇一七年二月六日にトランプ大統領が抜本的に変更した。トランプ大統領がホワイトハウスで演説し、エルサレムをイスラエルの首都として「公式に承認す

る時だと決断した」と述べ、宣言文書に署名し、テルアビブにあるアメリカ大使館をエルサレムに「可能なかぎり速やかに」移転させる手続きを始めよと、国務省に指示したからだ。トランプ大統領の決定に対しては、世界的規模で反発が強まっている。トランプ大統領がこの決定を行ったのは内政要因からだ。アメリカでは、二〇一六年の大統領選挙にロシアが干渉したのではないかという「ロシア疑惑」が大きな問題になっているが、捜査を担当するロバート・マラー特別検察官が二月一日、マイケル・フリン前大統領補佐官を連邦捜査局（FBI）への虚偽の供述をした偽証罪で起訴した。同日、フリン氏はワシントンの地方裁判所に出廷して起訴内容を認めるとともに、司法取引で捜査に協力する意向も示した。この結果、トランプ政権に打撃を与える証言が出てくる可能性が高まった。ここでトランプ大統領としては、自らの中核的な支援者である親イスラエルの宗教右派の支持を固めるために、在イスラエル・アメリカ大使館をテルアビブからエルサレムに移転し、中東に大混乱を引き起こすことで、ロシア問題を政局の争点から外そうと試みたと私は見ている。

内政的な基盤を強化するために、外交的危機を煽^{あお}るのは、ファシズムの常套手段^{じょうそうしゅん}だ。トランプ大統領の「文法」を理解するためにも本書は役に立つと思う。

序章

なぜ今、ファシズムを
学ぶ必要があるのか

日本のファシズム関連本が役に立たない理由

本書の目的は、ファシズムの思想と論理を理解し、それを国内外の情勢分析に活用できる力を身につけることです。

ではなぜ今、ファシズムについて学ぶ必要があるのでしょうか。それは世界各国でファシズムの進展する可能性が今後、高まってくるからです。現代の世界情勢を分析するうえで、ファシズムの論理を知らないことは致命的と言えます。

しかし、現在日本で出版されているファシズム関連本の多くは、まったく役に立たないものばかりです。たとえば、現代の日本において「ファシズム」という言葉は、多くの場合、自由主義・共産主義を排撃する「極右の国家主義的政治形態」と考えられています。しかし、本来のファシズムとは、第一次世界大戦後のイタリアに登場した「国家ファシスト党」の政治運動や思想を指す言葉です。それは一言でいえば、失業・貧困・格差などの社会問題を、国家が社会に介入することによって解決することを目指すものでした。

ところが、多くの日本人は「ファシズム」と聞くと、まっさきにナチス・ドイツを思い浮かべてしまう。つまりナチズムとファシズムを等号で結びつけてしまっているのです。そのため、「ファシズム」「ファシスト」という言葉は、日本では戦後から現代まで「絶対

悪」を示す罵倒語としてしか使われてきませんでした。

「ファシズムⅡナチズム」と捉えているかぎり、複雑な論理で組み立てられているファシズム現象を分析することはできません。だからこそ、ファシズムの本質とその内在的論理を、しっかりとつかんでおくための書籍が必要なのです。

新・帝国主義の時代

私は、これまで二〇〇八年以降の世界を「新・帝国主義」の時代として分析してきました。

一般に、帝国主義とは「一八七〇年代末以降、巨大企業が国家と結びついて海外進出や植民地の拡大を図る、列強の経済的・軍事的な膨張政策」のことを意味します。

歴史を振り返ってみると、帝国主義の勃興には「覇権国家の弱体化」が伴いました。かつてイギリスが覇権国家だった時代は、自由貿易の時代でした。しかし、イギリスの力が弱くなると、ドイツやアメリカが台頭しはじめ、やがて群雄割拠の帝国主義の時代に突入しました。

その後、二回の世界大戦とソ連崩壊を経て、二〇世紀末にはアメリカが圧倒的な覇権国

家として君臨するようになります。しかし、二〇〇一年の同時多発テロ事件と二〇〇八年のリーマン・ショックを経て、アメリカの弱体化が明らかになると、今度はロシアや中国が軍事力を背景に、露骨に国益を主張するようになりました。その結果として訪れたのが、かつての帝国主義を反復する「新・帝国主義」の時代なのです。

ただし、現代の新・帝国主義は、かつての帝国主義とは異なります。

一九世紀末から二〇世紀初頭まで、欧米の帝国主義列強は軍備拡大を競い、植民地を求めて抗争を繰り返しました。その植民地獲得競争の結果が、第一次世界大戦でした。

それに対して、二一世紀の新・帝国主義は植民地を求めません。それは人類が文明的になったからではなく、単に植民地を維持するコストが高まったからです。しかし新・帝国主義の時代であっても、外部からの搾取と収奪により生き残りを図るという帝国主義の本質や行動様式自体は変わっていません。

こうした新・帝国主義の時代には、二つの異なったベクトルの引っ張り合いが繰り返されます。一つは**グローバル化の進展**で、もう一つは**国家機能の強化**です。

一九世紀後半もまた、グローバル化の時代でした。一九世紀は「移民の世紀」と呼ばれており、第一次世界大戦までの一〇〇年の間に新大陸へ渡ったヨーロッパ人は、およそ六

〇〇〇万人に上ると言われています。多くの人が移動すれば当然、国境を越えた資本の移動も活発になる。グローバル化の進展により、欧米列強はやがて国家と独占資本（生産と市場を独占的に支配する大資本）が結びつき、力による市場拡大と植民地化を目指すようになりました。

この構造は、冷戦崩壊後の現在も同様です。

グローバル経済が浸透した結果、先進国の国内では格差が広がり、労働者の賃金も下がっていきました。規制緩和や労働市場の柔軟化が進み、雇用が不安定になると、それは結果として社会不安へとつながっていく。そうした社会不安が国内で増大する時、国家は自らの機能を強化していきます。つまり、グローバル化の果てに訪れる新・帝国主義の時代に、国家が機能を強化していくのは、ある意味必然と言えるのです。

二〇一六年に起きたブレグジット（EUからのイギリス脱退）の選択や、二〇一七年のアメリカのトランプ大統領誕生も、グローバル化に伴う国家機能の強化の表れに他なりません。EU離脱はイギリス国民が国家の完全な主権回復を求めた結果ですし、トランプ大統領の誕生もアメリカ国民が、「アメリカ第一主義」で国内優先の姿勢を示すトランプに対し、強い期待を抱いた結果です。

グローバル資本主義に対する三つの処方箋

この新・帝国主義時代の国家を、私たちはどのように理解すべきでしょうか。こうした問いかけは、「ファシズムと、どのようにつきあっていくか」という問題に置き換えることができます、私は考えます。

なぜか——それはグローバル資本主義に対する処方箋は、歴史上三つしか存在しないからです。

一つ目は、外部から収奪する帝国主義のさらなる強化です。しかし、国家同士の利害が衝突すれば、それは戦争へとなだれ込む危険を伴います。

二つ目は、共産主義革命です。資本主義システムを打倒することで、社会問題を一挙に解決する方法ですが、この処方箋が失敗に終わったことは歴史により証明されています。

三つ目が、本書のテーマであるファシズムです。

先にも述べましたが、ファシズムとは本来「国家の介入によって国民を統合し、自由主義的な資本主義が生み出す問題を克服していこうとするもの」です。その意味では、福祉国家のイメージときわめて近いと言えます。

おそらく先進諸国の多くは、今後、帝国主義とファシズムを織り交ぜることで、グロー

バル資本主義の弊害を乗り切ろうとしていくでしょう。しかし、それは排外主義的な民意を醸成するという大きな危険を孕^{はら}んでいる。だから私たちは、今こそファシズムについての理解を深めなければならないのです。

福祉国家としてのファシズム

ここでファシズム体制が、福祉国家に近い理由を説明しておきましょう。

国家が介入する社会問題の処方箋は、多かれ少なかれ「排外主義」の要素を含んでいます。排外主義の要素が比較的薄ければ「福祉国家」となり、濃厚になると「ファシズム国家」が誕生する。表出する形は違いますが、両者の違いは濃淡の差でしかありません。ここで重要なのは、福祉国家もまたファシズムの論理から理解できるということです。

わかりやすい例として、フランスのトマ・ピケティが唱えた格差是正の解決策を見てみましょう。ピケティは『21世紀の資本』（みすず書房）で、二〇〇年にわたる資本主義国家のビッグデータを分析し、資本主義国家では貧富の格差が常に拡大することを実証しました。

資本主義が格差を拡大してきたことは間違いありません。しかし問題は、「なぜ資本主

義では、格差が拡大するのか」ということです。

この点で、ピケティとマルクス経済学は意見を異にします。

ピケティは近代経済学にもとづいて、格差拡大を「分配」の不備に求めました。つまり、労働者への利潤の分配が少ないことが、格差拡大の原因だというわけです。そもそもピケティの立論は前提として、生産によって得た利潤は、資本家と労働者で分け合うものであるという「分配論」にもとづいています。

それに対して、マルクス経済学では労働者の賃金は「生産論」で決まると考えます。これは、労働力の再生産の費用で賃金が決まるということです。

労働力を再生産する費用には、三つの要素があります。第一に、食費や住居費、被服費など、労働者が労働を続けられるだけのお金。第二に、労働者階級を再生産する費用——つまり家族を持ち、子どもを育てて労働者として働けるようにするためのお金。そして第三に、自己教育のためのお金です。

マルクス経済学ではこの三要素で賃金が決まるとされているので、労働者がどんなに一生懸命働き、それによって利益を上げたとしても、労働力を再生産する以上の賃金が労働者に支払われることはありません。利潤の分配は資本家と地主、もしくは産業資本家と金

融資本家の間で行われるのです。

このように、ピケティとマルクス経済学では、格差の生まれる原因についての分析が異なります。そうなるのが当然、それに対する処方箋も変わってくるでしょう。

具体的に言うと、ピケティは国家が介入し、累進的な所得税・相続税に加え、資本税を徴収することが効果的だと考えました。そのうえで、経済のグローバル化で「ヒト」「モノ」「カネ」が自由に移動するようになったことに対応して、超国家的な徴税機関の創設も視野に入れるべきだと主張したのです。

この超国家的な徴税機関を視野に入れるという点を除けば、ピケティの考え方は、構造的貧困を再分配によって解決するという常識的な発想だと言えます。

戦前の日本では、河上肇^{かわかみ はじめ}がピケティとよく似た考えを持っていました。河上肇は貧乏の原因について、著書『貧乏物語』（岩波文庫）で次のように述べています。

世間にはいまだに一種の誤解があつて「働かないと貧乏するぞ」という制度にしておかぬと、人間はなまけてしかたのない者である、それゆえ貧乏は人間をして働かしむるために必要だ」というような議論もあるが、少なくとも今日の西洋における貧乏なる

ものは、決してそういう性質のものではなく、いくら働いても、貧乏は免れぬぞという「絶望的の貧困」なのである。

（『貧乏物語』三五ページ）

河上肇は、このような構造的貧困を解決するには、「社会組織の改造よりも人心の改造がいっそう根本的の仕事」で、「富者の奢侈^{しゃし}廃止をもつて貧乏退治の第一策とし」、貧困者への再分配が行われれば「社会組織は全然今日のままにしておいても、問題はすぐにも解決されてしまうのである」と結論づけました。

ピケティも河上肇も、富の再分配を構造的貧困の処方箋と捉えている点では共通しています。そして、おそらくリベラルな感覚を持つ一般市民の考えも、二人に近いかもしれません。

しかし両者では、想定する分配の主体が異なります。ピケティが分配の主体を「国家」とするのに対して、河上肇は「社会（自覚した富裕層）」と捉えました。

おそらく多くの人は、こうした河上肇の考えを非現実的だと判断するでしょう。良心にいくら訴えたところで、「そんなに困窮しているのなら、自分の利潤を削ってでも労働者への分配を手厚くしよう」などと考える資本家がいるはずはないと。資本家として市場で

の競争に勝利して、生き残っていくためには、貧困者への再分配に自発的に提供するカネなどあるはずがないのは明らかです。

したがって分配論で考えるかぎり、合法的な暴力装置を持つ国家が徴税によって、再分配を行うというピケティ・モデルに収斂^{しゅうれん}していくことになります。しかし、このピケティ・モデルを実現するためには、強力な国家と多大な権限を持つ官僚群が、資本家を抑え込まなくてはなりません。それはイタリア・ファシズムに親和的なモデルに近づいていきます。

日本人のファシズム・アレルギー

おそらくこのように説明しても、福祉国家とファシズムの結びつきに対して、ピンと来ない人のほうが圧倒的に多いでしょう。その理由は、はっきりとしています。それは先述したように、「日本ではファシズムという言葉自体が、マイナスの評価を帯びすぎてしまっている」からです。ファシズムという言葉を出した時点で、日本では議論の対象にもならない。しかし、ファシズムというものをきちんと思想的レベルで捉えておかないと、かえってまずい事態が起こりうるのです。

なぜか——それは「一見、口当たりのいい福祉国家政策」のなかに含まれている、排外

主義的な側面を見逃してしまうからです。ファシズムとナチズムは論理構成からして異なりますが、ファシズムの取り扱い方を間違えると、ナチズムのような、アーリア人が優秀であるという「人種神話」に傾きかねません。

ファシズムは資本主義や共産主義を乗り越える思想として、二〇世紀に登場しました。グローバル資本主義が暴走し、それに対抗するイデオロギーが存在しない現代において、このような歴史は必ず繰り返されます。

その時のファシズムは、おそらくかつてのものとは姿を変えて現れることになるでしょう。二〇世紀ファシズムが犯した過ちを繰り返さないためにも、ファシズムについて正面から取り組み、整理しておくことは大切です。ファシズムという言葉にアレルギーを持つて、回避しているだけではかえって事態は悪化してしまいます。

真理は人を自由にする

たとえば、トランプ政権はファシズムとどのぐらい親和的なのか。安倍晋三政権下の日本はファシズムへと接近しているのか。こうした問いに対して、日本の言論界は明確な説明をほとんど与えることができていません。その理由は、先にも申し上げた通り、ファシ

ズムの概念をきちんと捉えられていないからです。

ファシズムの周りには、ファシズムと混同して語られるいくつかの概念があります。民族主義、純血主義、ナシヨナリズム、全体主義、ナチズム、独裁などがそうです。その違いを理解しないと、上記のような問題を正確に把握することはできません。

たとえば聖書には、「真理は人を自由にする」という言葉があります。

不自由や束縛から目を背けるだけでは、苦境は解消されないどころか、ますます追い詰められていくばかりです。いったい何が自分に不自由をもたらしているのか。そのメカニズムを深く理解しえた時、初めて人は「制約には『外部』が存在することを知り、自由の感覚を得る」ことができます。

ファシズムのメカニズムを深く学ぶ必要があるのは、同じような理由からです。ファシズムの内在的論理を理解することができれば、少なくともファシズムの暴走に振り回されることはなくなります。

日本のファシズム理解が浅い原因の一つとして、近代イタリア史とファシズムの展開が十分に理解されていないことが挙げられるでしょう。別の言い方をすれば、ナチズムや戦前日本の軍国主義などをファシズムの典型としてイメージしてしまうのです。

そこで本書では、近代イタリアの歴史にまでさかのぼり、ファシズムが生まれる過程を詳細に追うことで、ファシズムの思想性や論理、問題点を明らかにしていきます。

資本主義と共産主義のどちらをも乗り越えようとしたファシズムの内在的論理とはどのようなものなのか。それを知ること、新・帝国主義のゆくえを展望する一助とすることが、本書の目標です。

ファシズムの正体
佐藤優・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：700 円（本体）＋税
発売日：2018 年 2 月 7 日
ISBN：978-4-7976-8019-5 C0231

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)